
トラスト物語

如月 充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラスト物語

【Nコード】

N8459Y

【作者名】

如月 充

【あらすじ】

ウムブラ王国を襲ったダークドラゴンからウムブラ王国を救った英雄、そしてダークドラゴンの契約者として有名な父。コンストラクター

しかし、父の弟トゥレチェの手によって父は殺され、主人公トラストは家族とバラバラにされてしまう。

トラストは、父の復讐を誓い行動を起こす！

プロローグ

人が、魔物という脅威を自らの力とする方法に気づき、100年余り。人の世界に、契約者（コントラクター）という魔物を使役する人が増えていった。

フェッセ大陸の中央に位置し、北と東を山に囲まれているウムブラ王国の首都【グラーツィア】に家を構えている、トラスト・フロウは父のジェイ・D・フロウの弟、そして叔父上であるトゥレチェ・フロウに会えるのを楽しみにしていた。

ある日を境に、父と会わなくなりいつの間にか【グラーツィア】から南10キメルにある【パッシェ】という街に住んでいると聞き、悲しんだ。その日までは、王宮で使えている父の代わりによく遊んでくれた楽しい思い出がいっぱいだったのだ。

そんな叔父が、久しぶりに父を自分の誕生日に招く手紙を送ってくれたのだ。何故か渋っていた父を、何とか説得し行くことが決まった日から、この日が来るのをどれだけ楽しみにしていたことか。

「父上！ 父上！ 早く！」

急かして来る息子のトラストの様子に苦笑を浮かべながら、ジェイは妻のシルビアが娘のシオンの身支度を整え終えるのを見る。

シオンは、身支度が終わると笑顔で兄のトラストへ走っていく。シオンもトゥレチェに会えるのを楽しみにしているという事だろうと思う。

しかし、そんな子供たちの笑顔とは逆に、こちらの気は重くなっていく。何故、こんな時に弟は、私に会おうとするのか。

ウムブラ王国の南西にあるルークス王国。そこに攻めようとする陛下を、私が押し止めているこんな時に。

「父上！早くしないと遅れるよ！」

息子に促され、家の前に止まっている弟の迎えである馬車へと歩く。トゥレチェは、自分の考えすぎだ、息子たちの笑顔を大切にしようと思理やり嫌な考えが過ぎる思考を切り替える。

【グラーツィア】を出てから、3時間。漸く目的地に着いたのか動きが止まる。少しすると、馬車の扉が開けられる。開けられた先には、弟のトゥレチェが疑いたくなるほどの笑顔で、こちらが降りてくるのを待っていた。

馬車が止まり、扉が開けられると叔父上の姿が見える。叔父上の姿が見えると、シオンの手を引き、馬車を降りる。そして、叔父上の前へと走りより笑顔を向け、久しぶりに挨拶をする。

「トゥレチェ叔父上！お久しぶりです。お誕生日おめでどう御座います」

「おお、久しぶりだな！ありがとう、トラスト。それにしても大きくなったな」2人は今いくつになった？」

「僕は12歳で、シオンは10歳です、叔父上！」

「そうかそうか、もうそんな年か！ついこの間まで、こんなだったのにな」

そう言うと、叔父上はトラストの臍の辺りを示す。それに、顔を膨らませながらもトラストは叔父上の手を握り、叔父上の家へ入ろうとしていく。

「叔父上、早く家に入りましょうよ！」

「おいおい、私の家なんだがな」

そう言いながらも、叔父上はトラストに手を引かれていく。そして、シオンも叔父上の手をトラストと同じように引きながら、家へと向かっていく。

そんな息子たちの様子に困った顔をしながらジェイとシルビアは、トゥレチェの家へと入っていく。

家に入ると、すぐに長テーブルのある部屋へと案内された。入り口から、奥に父上、母上、そして僕にシオンが座り最後に叔父上が座った。

座ったのを確認すると、叔父上は両手を叩く。すると、入ってきたのは給仕ではなく鎧を着た兵士8人だった。その展開に頭がついていかず、兵士たちが自分たちの後ろに2人ずつ立つのを見守ってしまふ。自分の後ろに兵士が居ることに恐怖を感じ、震えていると叔父上が喋り始めた。

「トラストにシオン。すまないな、怖がらせて。だが、少し兄上に大事な話があるんだ。話が終わるまで静かにしていてくれ。そうすれば、兵士たちは何もしない」

叔父上に、そう言われトラストとシオンは恐怖に震えながらも首を何度も縦に振る。その様子に、叔父上は笑顔を浮かべると父上の方を見た。

すると、叔父上は呆れた表情を浮かべ顔を横に振る。

「兄上、そう睨まないでください。兄上がこちらの言うとおりにして頂ければ兵士は下がらせます」

「トゥレチェ……!」

「そう怖い顔をしないでください。私は、陛下に頼まれただけです。兄上が契約しているダークドラゴン。その力を使い、ルークス王国を滅ぼすようにと……ね」

「ならぬ！　ダークドラゴンの力は抑止力だ。もし、戦争に使えば
ルークス王国だけではない！　我がウムブラ王国も滅びるしかない
ぞ！」

「ウムブラ王国の英雄、ジェイ・D・フロウ。本当は、兄上であれば
良かったが仕方ありません。ダークドラゴン……その力を私に譲
渡してください」

「ならぬ！」

「本当に、譲渡して頂けぬと？」

「くどい！」

「仕方ありません……残念です」

叔父上が頷くと、父の後ろに立っていた兵士2人が剣を抜き、父上
の口を塞ぎ、その剣を父へ突き刺す。そして、父の体から血が噴き
出しテールを血で汚す。そして、父を助けようと動こうとした母
も後ろに居た兵士に剣で刺される。

「父上！　母上！」

「父様！　母様！」

父上と母上の刺される姿を見て、トラストとシオンは叫ぶことしか
出来なかった。泣き叫ぶトラストとシオンを兵士たちは部屋の外へ
と連れ出そうと動く。トラストは、兵士に部屋の外へ連れ出されそ
うになりながらも、叔父上に叫ぶ。

「叔父上！　何故！？　何故、父上と母上を殺したんですか！」

「トラスト。貴方の父上は、力を持ちながらも、その力を国の発展
の為に使おうとしなかった……その罰です」

「そんな理由で！？　放せよ！　父上と母上の仇を！」

「お前ら、トラストとシオンは黙らせて何処かの奴隷商に売って来
い！」

（子供の命まで取る必要はあるまい……）」

兵士たちによって、気絶させられたトラストとシオンを横目に見ながら兄であるジェイの死体から浮かび上がるリングに目を奪われる。これが1度、この国を滅ぼしかけたダークドラゴンのコントラクトリング。

逸る心を落ち着かせ、自分の人差し指をナイフで切る。切った痕から出てくる血を、そのリングに1滴垂らす。すると、そのリングは1度光を放つと消滅する。そして、再びトゥレチェの右手首に現れる。その現れたリングを見やり、トゥレチェは笑いを抑えることが出来ず辺りに響かす。

「くくくう、あははははは！！　これで、私は！」

トゥレチェは、そのダークドラゴンのコントラクトリングを手にくぐにウムブラ王国の首都【グラーツィア】を目指し、陛下へと謁見する。

陛下は、トゥレチェとの謁見後。すぐに、ルークス王国へと宣戦布告する。宣戦布告をすると、ウムブラ軍はすぐにダークドラゴンを実戦へ投入する。ダークドラゴンの投入のためルークス軍の頑張りも空しくルークス王国は10日弱で滅び、ルークス王国の領土は、ウムブラ王国となった。

ブログ（後書き）

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第1話（前書き）

2011／11／26 加筆修正

第1話

あれから、6年。そう父上が叔父上に殺されて、僕が奴隷に成り下がりスキアという街で、剣闘士という生活を強いられて6年だ。

何度、死にそうになった事か。だけど、トゥレチェへの復讐という思いだけでこれまで生きてきた。いつか、必ず生きてスキアを脱出し、トゥレチェを殺し父上の仇を取る。そして、妹シオンを見つけだし母上の元に帰るんだ。

「さあ！ やって参りました！！ 本日のメイン闘技！ 東、トラスト！！」

闘技場へ続く通路で待機していたトラストは、そう呼ばれると闘技場へと歩き出す。

闘技場へ出ると、周りから歓声が起こる。しかし、トラストはその歓声に応えることなく対戦相手が出てくる入り口を凝視し続ける。

司会者は、そんなトラストの様子を気にした様子もなく、盛り上げるべく更に相手の戦績などを言ってから、漸く対戦相手の名前を叫び始めた。

「西、ジルバ！！」

司会に、呼ばれ西の入り口。トラストが睨む先の入り口から、トラストと同じく薄汚れた布切れを纏った13〜14歳ぐらいの少年が姿を見せる。

しかし、その姿には少年らしい雰囲気を感じられず、代わりに殺伐とした雰囲気を感じていた。

それも、当たり前かと思う。この場所で、そんな雰囲気を残していたら生き残れない。そして生き残るために俺も、恐らくこいつジル

バも同情なんて気持ちはとつくの昔に捨てているはずだと思う。

「勝負開始!!」

司会から試合開始の言葉が出ると、ジルバはトラストに向かって走ってくる。そして、殺気を撒き散らし、右手に持っている剣を振ってきた。それを、トラストは体を横にずらし攻撃をかわす。

トラストはジルバの攻撃をかわすと、相手の首を目掛けて剣を振るう。しかし、ジルバは剣を引き戻し、トラストの剣を受け止める。ジルバは、受け止めるとトラストの剣を弾き、隙を作る。

トラストは剣を、弾かれ隙を見せてしまうがジルバが大きく剣を振りかぶってくれたおかげで、ジルバが剣を持つ右手首を掴みジルバを地面に引き倒す。そして、倒れたジルバの心臓に向かってトラストの持つ剣が突き刺さる。

「いや……だ! 死にたくない……!」

最後に、何かを言ったジルバを一瞬だけ見やりトラストは虚空に視線を送り司会が試合の終了を合図するのを静かに待つ。

「勝者! 東、トラスト!!」

「(僕は、自分が生きるために他人を殺す……)」

司会が終了の合図をすると、閉じられた東の入り口が開けられる。トラストは、ジルバの血に濡れる剣をそのまま持ち東側の通路を歩く。トラストは、通路を真っ直ぐ歩いていると右手に食堂があり、食堂へと入っていく。

食堂へ入ると、長テーブルが6個並べられており今日の試合を終えた人間が食事をしていた。トラストは、カウンターで食事を貰い空いている席に食事を置き座る。

静かに、食事をしていると近くで食事をしていた数人の人間が細々とトラストに声を掛けてきた。

「トラスト。此処を出たいと思わないか？」

「なんだ、いきなり？」

「此処を出るんだよ！ 嫌じゃないのか！？ 死ぬまで見世物にされるんだぞ！」

「嫌に決まっているだろ！ だが、そう思い行動を起こして失敗した奴らがどうなったか知っているだろ？」

そう声を掛けてきた奴の言葉にトラストは、こちらの思いも知らずにといい声を荒げてしまう。しかし、相手は声を荒げたことを気にした様子もなく話を続けている。

「だから、人を集めているんだ。人を集めれば脱出に成功する人間も出てくるだろう。だけど、もし失敗しても恨みっこ無しという条件だけだな」

「いいだろう……いつだ？」

トラストは、自分が失敗するとは考えず相手の提案を受ける。

「2日後。皆で暴動を起こす、その隙にそれぞれ逃げるんだ」

食事を終え、自分が眠る牢屋へと戻る。牢屋に戻ると、床に直接横になり先ほど男に言われた暴動の話を思い出し自分の脱出ルートを考える。

第1話（後書き）

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第2話（前書き）

お待たせしました。第2話です

第2話

食堂で、暴動の話を聞き2日経った。そう、もう暴動を起こす当日になっていた。トラストは、緊張で心を押し潰されそうになりながらも自分が入っていた牢屋を、離れる。

牢屋を出ると、そのまま食事をするため食堂へと向かう。食堂へ着き、カウンターで、今日の朝食を受け取り入り口から一番遠い奥の空いている席へと座る。席へ座り、トラストはふと気まぐれに周りに居る人たちを見回す。

食堂に居る人間が纏う雰囲気は、今日の試合で死ぬかも知れないという緊張とも、脱出に掛けるこれからの未来を思っの緊張。両方と感じられる何とも固い雰囲気を食堂全体に蔓延させていた。

この食堂に居る何人が今日のことを知っているかは知らないが、この雰囲気になるのは仕方がないと思う。トラストだって、緊張しているのだから。

食堂の緊張した雰囲気を感しながら食事を進めっていると、入り口に槍を持った兵士が2人左右に立ち、その間に豪華な服に身を包んだ男が立っていた。

「貴様たち、今日の闘技には我がウムブラ王国の英雄で在らせられるトゥレチェ・D・フロウ様が見に来られる。貴様達、くれぐれも不甲斐ない試合を見せるんじゃないぞ！」

豪華な服を着ている人物から発せられた思いもよらぬ言葉に椅子が倒れる音を食堂内に響かせながら、立ち上がってしまう。その音を聞き周りで食事をしていた人間は、どうした？ と問いかける視線をトラストに向ける。しかし、トラストは自分が見られているとも気づかずに、落ち着け！ と自分を落ち着かせようと精一杯だった。そして、いつまでも立ち続けているトラストに気を悪くしたのか男

が眉を顰めてトラストに顔を向ける。

「貴様！ 座れ！」

トラストを見た男が、そう怒鳴りながら側に控える2人の兵士にトラストの方向を指し示すと兵士2人は槍を構えながら、トラストへと急ぎ足で駆け寄っていく。

未だに、立ち続けるトラストの後ろから左右に挟み込むように兵士2人は立つ。そして右に立つ兵士がトラストの左肩を、槍の刃の逆位置する石突きで叩きトラストの意識を自分にへと向けさせる。

トラストは、左肩を叩かれた様な気がして後ろを振り向く。すると、そこには入り口に居たはずの兵士2人が、槍を構えた状態で自分の左右に立っている状態だった。その事に少し驚きながら、兵士が用件を話し出すまで待つことにする。待つことにするといっても、奴隷である自分たちは同じ奴隷同士以外では話す権利さえ持っていないから、待つことしか出来ないのだが。

「貴様！ カトウーロ様の言葉が聞こえなかったのか！？ さっさと座れ！」

右に立っていた兵士が、そう言ってきた。カトウーロってのは入り口に立っている男。そいつが、何かを言っていたみたいだが自分がカトウーロのお言葉を無視したから、カトウーロの側を離れ此処まで来たという事なんだろう。

トラストは、この場で騒ぎを起こし脱出のチャンスを探すつもりは無いため素直に兵士に言われた通りに、倒れていた椅子を直し腰掛ける。

トラストが、素直に腰掛けるのを見た兵士2人はホッと安心した表情を見せた。大分、緊張していたようだった。たぶん、兵士2人はトラストが暴れて周りに居る奴らも触発されて、暴れられたら幾ら

装備を固めようとも勝てないとわかっているのだから緊張するのも当たり前かと2人を見る。

そして、2人は直ぐに意識を引き締めトラストから離れていく。トラストから離れて、入り口まで100トルメ。丁度、部屋の中央に差し掛かると兵士2人が考えていたことが現実となる。

一斉に、トラスト以外が立ち上がったのではないかと思うぐらいの奴隷が立ち上がったのだ。そして、兵士の近くに居た奴隷たちは何が起こったのか分からず突っ立ったままの兵士から槍を奪い取り、即座に槍を兵士の心臓の部分へと突き刺す。

槍を心臓に突き刺され、血を噴き出しながら兵士2人は絶命し床を血で汚しながら倒れる。そして、何が起こったのか分からない内に護衛である兵士2人を失ったカトウーロは、悲鳴を上げながら何処かに走り去っていった。

トラストは、食堂内でのいきなりの出来事に驚き呆然と笑い出す奴隷たちを見やる。まさか、この場で暴動を起こすとは思ひもしなかった。確かに、起こすタイミングはチャンスがあればと聞かされていたが、てっきり闘技中に起こすものだと思っていたのだ。

「では、皆^{みんな}！ 外で会おう！！」

そう男が、大声で言う。奴隷たちは雄叫びを上げながら食堂を離れていく。トラストも、呆然としている場合ではないと思ひ氣を引き締め、皆が食堂を出て行く所を食事を受け取るカウンターへと走りより、体をカウンターのの上に横たえらせ乗り越える。

乗り越えた先には、騒ぎのためか作っている途中の料理を放棄した跡を残し誰一人居ない状態だった。が、トラストは氣にした様子もなく奥へ続く扉を潜る。

扉を潜った先には、たぶんコック達の更衣室か何かに続く上り階段と、『この先、危険！』と書かれた木の立て札が立てられている下り階段があった。トラストは、その『この先、危険！』の立て札を

1度見ると、深呼吸をし階段を下りていった。

階段を降りると、階段の先に壊された鉄格子がある以外何もない空間へと出た。トラストは、そのまま鉄格子を潜ろうとすると後ろから声を掛けられる。

「おい！ ちょっと待ってくれ！」

トラストが、後ろを振り向くと腰の部分に2本の剣を差している長身の男がゆっくりと歩いて来ている所だった。そのゆっくりとした動作につい、いらぬ声を掛けてしまう。

「無事、外に出たかったら急いだほうが良い」

「あはは、兵士に捕まる心配？ 君……もしかして此処の事。何も知らない？」

未だに、ゆっくりとした動きでこちらに近づいてくる男に注意をしたつもりが笑われてしまい気を悪くする。そして、つい素っ気ない態度を取ってしまう。

「何を？」

「あはは、ごめんごめん。気を悪くしちゃったかな。でもね、この道で心配するべきは、自分の命だよ」

「どういことだ？」

「何、簡単な事さ。この道の先には、魔物が生息している洞窟に繋がっている。何故、そんな入り口が存在しているのかは分からないが、魔物が追手の代わりに逃亡者を殺してくれると言うわけさ」

トラストは、男に言われた事を一瞬だけ考えるが自分の目的は復讐だ。もし、復讐の前に命を失うなら、復讐に対する想いが足りなかったとそこまでだったと諦めるさと考え、男を無視しそのまま鉄格

子の先へ行こうと歩き出す。

「だから、待てって！」

トラストは再び律儀に足を止め、後ろを振り向くが視線にさっさと用件を話せという気配を含ませる。すると、男が視線に込められた言葉に気づいたのかは分からないが声を掛けてきた理由を話し出した。

「この道を選んだのも何かの縁だ。外まで一緒に行動しないか？」
「好きにしろ」

男の提案に、トラストは素っ気なく答え今度こそ鉄格子を潜る。トラストの行動に、今までゆっくりしていた男が慌てて鉄格子を潜ってくる。

「ハロス！ ハロス・リーパーだ！ 外までだけど、よろしくな！」

よろしくと言われ、トラストは三度ハロスと名乗った男へと振り向く。振り向くとハロスは、腰に差していた剣を1本鞘ごと抜き取りトラストへと差し出してくる。何故、差し出してくるのか分からず受け取らずにいると、ハロスは苦笑を浮かべて喋りだした。

「この先、魔物が居るって言っただろう？ 素手で戦うのは厳しいぜ？」

「ああ、ありがとう。……トラスト。トラスト・フロウ」

トラストは、お礼を言いハロスが差し出す剣を受け取る。剣を受け取ると後ろに振り向き、自分の名前を名乗って歩き出す。ハロスはその場で立ったまま、トラストが名乗ったその名前を何度も口に出

し頭に刻み込もうとしている。

トラストは、そのハロスの行動に気づいた様子もなく歩く。途中で、ハロスが距離が離れていることに気づいて、覚えたばかりのトラストの名を連呼しながら駆け寄ってくるのだった。

第2話（後書き）

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第3話

「はっ！」

途中で一緒に行くことになったハロス・リーパーという男と、どういう訳か、壁に立て掛けられている松明を目印に洞窟の先を進んでいると大量の緑色の皮膚をした魔物、ゴブリン。それにコウモリの姿をした、ブラッドバットと遭遇し2人で協力して戦闘を行っていた。

トラストは、上空から来るブラッドバットの羽を目掛けて振り上げ地上へ落としていく。その隙に、手に持っている棍棒を振り下ろしてトラストを攻撃して来ようとするのをハロスが剣で弾き、切り伏せる。

更に、そのハロスの隙を衝いて攻撃を仕掛けてくるゴブリンやブラッドバットの攻撃をトラストが、カバーし敵を倒していく。

そして、お互いの隙をカバーし合い10分以上の戦闘の末大量の魔物たちの排除を終わらせた。

トラストが、戦闘を終えひと息吐いているとハロスが、倒したばかりのゴブリンやブラッドバットの死骸の近くにしゃがみ込み、コソコソと何かしているのが目につき、疑問に思い何をやっているのかと問い掛ける。

「何って……素材を回収してるんだよ。ほら、トラ。素材回収手伝えっ！」

「トラ……?」

トラストは、なるほどなと納得しているとハロスから出てきた聞きなれない単語に、聞き返してしまう。何だ、トラってまるで猫に付ける名前じゃないか。

「ん？　トラストって何か言い難いじゃん。だから、略してトラって訳」

「あ、ああ、そうか。だけど、その呼び方。やめてくれないか？」

言い難いのかとも思いながらも、絶対にトラって呼ばれるのだけは嫌だ。だから、何としても普通に名前を呼ばせなければと取り合えず、正直に頼んでみる。

「やめんの？　んー、トラストって呼び難いし、何より何か可愛くないからなく。やっぱ、無理。俺は、トラって呼ぶぞ！」

そのハロスの発言に何が、何より可愛くないからだと言顔を顰めながら思ってしまう。

「可愛いかわ爱不くないかの問題じゃないだろ！　俺が嫌って言うてんだ！　普通にトラストって呼べ！」

「何を言う！　トラって呼ぶだけで、お前のその殺気を纏っている雰囲気は少しはごま……誤魔化せるはずだ！」

ハロス、素材を回収していた手を一瞬止めてこちらを振り向いて言葉を紡いでいたが、一度言葉を詰まらせると顔を戻し、手を動かして最後にそう言うてきた。それを聞いたトラストは、こいつ絶対誤魔化せてないって思ったなと思い、お前！　と言おうとすると先にハロスが喋ってきた。

「それに、トラと俺は外に出るまでなんだ。呼び方ぐらい外に出るまで我慢しろよ」

ハロスのその言葉に、何だか釈然としない気持ちになりながらもそ

うだなと納得してしまい、トラストは渋々ハロスに分かったと答えた。

「分かったら、トラ。早く、素材の回収手伝えよ!」

「悪いハロス。こいつらの素材は、どこを取ればいいんだ?」

トラストは、自分がどの部分が素材になるのか知らないためハロスに聞いた。すると、ハロスは驚いた顔をしたと思ったら直ぐに何か自分の中で納得できたのか、なるほどと頷いてトラストの質問に答えてくれる。

「ブラッドバットは、口から生えている牙。んで、ゴブリンは棍棒。取り合えず、棍棒は3本だけ。それ以上は荷物の邪魔になるから牙だけ取れば良いさ」

そして、ハロスはトラストに自分が腰に身に付けていた袋をこちらに渡してくれる。使っている布の種類が違うのか、色が違うところもあり所々小さな穴が開いているボロイ状態だった。

トラストは、袋を受け取るとブラッドバットから30本程の牙を抜き取ると袋が一杯になったため、ゴブリンの棍棒を3本を回収し回収を終えた。そして、既に回収を終えていたハロスに近寄っていく。トラストとハロスは、外に近づく道を進んでいく。時々、ゴブリンやブラッドバットと戦闘になるが、最初に遭遇した様な大勢ではないため2人は特に苦勞することもなく戦闘を終えていく。

そして、洞窟を進み約1時間。漸く松明以外の光を目の前に見つけた。その見つけた光に2人は、出会ってから初めて笑顔を見せあう。そして、出口に向かって2人は一緒にゆっくりと歩いていく。しかし、途中でハロスが何かに気づいたのかトラストの前に、手を出し止める。

トラストは、止められた事に何だと思いハロスに顔を向けると右側

の壁を凝視していた。

「どうした？」

「いや……。トラは、何か感じないか？ 壁を突き進むような振動を」

そう言われ、トラストは周囲の壁を見る。しかし、周囲の壁に特に異常はなく次は耳を澄ませる。数秒、澄ませていると確かにハロスの言うとおりで何か重く固い物同士がぶつかり合い砕けるような音が聞こえてきた。

トラストは、その音を頼りにもう一度周囲を見る。その間にも音は大きくなっていき、音が自分たちの上。天井から聞こえているのに気がつき2人は、揃って上を見る。

上を向くと、洞窟の破片が落ちてきていた。時間が経つにつれ崩れてくる破片の量が増えていき、2人は厳しい顔をしながら後ずさっていく。

ドガアンーーーー！！！！

2人が後ろに下がっていると、先程まで立っていた辺りの天井が突然崩れ砂埃を辺りに撒き散らす。そして砂埃が晴れるとそこには、赤く光る丸い宝石にも見える物体を中心に、人型を岩で形成している存在が居た。

「何で、此処にゴーレムが！？」

「ゴーレム！？ でも、大きさが！」

そうトラストの目の前に居るゴーレムと言われた存在は、どう見ても身長2メートルぐらいしかないのだ。トラストが、聞いたゴーレムの大きさは200メートルを超えたりしている。だから、目の前

に居るのはゴーレムではなく別の魔物ではないかと思ってしまう。しかし、ハロスが言う。ゴーレムは、場所や契約者の力量によってその大きさが変わってくる。だから、大きさをゴーレムと判断している訳ではないと。ゴーレムと判断するのは、中心部分にあるあの赤い物体が契約の腕輪だ。

そして、野生のゴーレムを倒すには中心部分にある物体を破壊するしかない。

「説明、ありがとう！ でもな、せめて反撃もしてくれてると助かったんだが！」

砂埃が晴れゴーレムが姿を現すと、ゴーレムはこちらを敵と認識したのかゴーレムの名で、スピードは遅いと思っていたトラストは認識を間違っていたと思い知った。

人型の小さな体のおかげか、人間と同じぐらいのスピードで走って攻撃を仕掛けてきたのだ。トラストは、ゴーレムの攻撃を避けながら反撃をしていたが、ハロスはゴーレムの攻撃を避けながら、反撃の変わりにゴーレムの説明をし始めていたのだった。

確かに、ゴーレムと初めて相対するトラストには説明は助かったんだが、戦闘中は、倒し方や弱点だけで他の部分は終わってからでも良かっただろと思う。

「悪い悪い、トラ。何かやるなら自分の気が済むまでやらないと落ち着かないんだよ」

ハロスは、そう言うとおりゴーレムの説明に気が済んだのか攻撃を始めた。ハロスが、攻撃をしてくれる様になりトラストも攻撃に集中する。

ゴーレムを挟み込み、交互にゴーレムを攻撃し気を散らす。気を散らした隙に、それぞれのタイミングで中心部分の赤い物体に攻撃を

当てていき、傷を広げていく。

赤い物体の傷が大分広がると、ゴーレムが焦ったのか周りにある石や石の破片を集めて大きな岩へと6個も形成し自分の周りに配置する。配置した岩はゴーレムの周りを高速で回転し近寄ることが出来なくなってしまった。

ゴーレムは、自分の周囲を回転する岩を攻撃にも使ってくる。6個存在する岩をトラストとハロスに向かって飛ばしてくる。トラストとハロスは、それを避けて攻撃に転じようとするが、飛ばした岩はブーメランの様に、元の位置に戻ってくる。そのため、直ぐに後ろに下がらざる終えなかった。

「はあはあ……くそ！ これじゃ、倒せねえ……！」

「はあはあ。確かにこのままじゃ、体力に限界のある俺たちがやられるな」

「あの岩を……はあ……どうにか出来れば……！」

そんな会話をしながらも、ゴーレムは容赦なく岩を飛ばしてくる。それをトラストはいつも通り回避し、戻ってきた岩も回避する。しかし、ハロスは飛んできた岩を避けたと思いきやその岩に向かって剣を振り下ろした。

すると、その岩は剣を折ることが出来ず逆に何の抵抗もなさそうに真っ二つにされた。それを見た2人は一瞬驚いてしまい体の動きを止めるが、直ぐに岩が飛んでくるのに気がつき避ける。そして、トラストも先程ハロスがやった様に岩に向かって剣を振り下ろした。そして、見たときに感じた様に特に抵抗もなく真っ二つに切ることが出来た。

「くそっ！ 見かけだけかよ……！」

トラストは、今まで振り回された岩に、溜まっていた鬱憤を晴らす

が如く残り3個の岩も躊躇なく切り裂いていく。そして、岩という守りを失ったゴーレムの中心部分に向かって力を溜めて突き刺す。それを、見ていたハロスはいまのトラストの表情に動きを止めてしまいボソッと、

「俺の怒りは何処に……？」

呟いていた。

そして、トラストの渾身の一撃の突きによってゴーレムの赤い物体は粉々に砕けていった。赤い物体が砕けたことによって今まで形成していた体は、力を失い地面に落ちていく。そして、ボロボロになっていた剣も赤い物体が砕けたときに一緒に折れてしまった。

剣を失いながらも漸く、終わったとトラストが安堵しているとトラストの視線の先に金色に輝く腕輪が、浮遊していた。

それを見たハロスが、その腕輪の事をトラストは知らないと思うトラストに説明を始める。

「契約の腕輪。一定以上の力を持つ魔物を倒すと現れる腕輪。契約を望むなら、その腕輪に30秒以内に自らの血を1滴垂らすことによって契約が成立。その魔物を使役できる。トラ、剣も失っているし何より記念にゴーレムと契約してみろよ」

ハロスの説明に、それぐらい知っている！ と力なく怒鳴りつつもそうだなと思い、腕輪に近づきゴーレムの戦闘によって流れている血を腕輪に1滴垂らす。

腕輪に1滴血が垂れると、一際金色の光が強くなるとトラストの目の前から腕輪が消える。消えたと思ったその瞬間にはトラストの右腕に現れる。

「ゴーレムとの契約。おめでとう、トラ！」

「ありがとう。ハロス……助かったよ」

ハロスに、トラストは心から感謝を言葉にする。恐らく、ハロスがこの道を選んでいなければ自分は、このゴーレムによって殺されていたかも知れなかったし、契約をしたかったかは分からないが、ゴーレムとの契約を譲ってもくれたのだから。

「何、俺だってトラのおかげで助かっているよ。だから、俺も……ありがとう」

そう言うと、ハロスはさっさと外に出ようぜと示すかの様に出口へと目指し歩いていく。トラストも、腕輪を最後に見るとハロスの後ろについて行くように歩き出す。

第3話（後書き）

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第4話

ゴーレムを倒し、その倒したゴーレムとトラストは契約して洞窟を抜けることに成功した。そして、無事に太陽の光を拝むことが出来た。

しかし、ゴーレムとの戦いで満身創痍となったトラストとハロスには傷の治療を行うことが出来ずに、もう一度戦闘を行わないといけない様だった。何故なら、トラストとハロスの目の前には、槍や剣などの武器を構え全身を鎧に身を包んだ完全装備の兵士が、10人程居たのだから。

「おい、洞窟を抜ければ追手の心配はないんじゃないのか？」

「そのはずだったんだけどね……たぶん念のため配置してただけじゃないの？ 兵士の数少ないし」

ハロスの言うとおりなのだろう。だけど、少なくともないだろ。今のトラストたちは、ゴーレムの戦闘で、体力の限界なんだから完全装備した兵士の相手10人は結構無理がある。そう思っていると、ハロスが人任せな事を言ってきた。

「んじゃ、トラ。さっさとゴーレムで蹴散らして。あ、でもゴーレムの大きさには気をつけてな？ 大きすぎると、気づかれて増援来ちゃうから」

確かに、ハロスの言うとおり武器のないトラストはゴーレムを召喚して反撃するしかない。けど、ハロスの言い方だと完全にトラスト任せに聞こえる。そう思いゴーレムを召喚してから、ハロスに戦えよと言おうと考えまずはゴーレムを召喚する。

「我が命に従え！ 出でよ、ゴーレム！」

召喚のため、ゴーレムの名前を呼びながら大きさをイメージする。イメージするのは、先程戦った2メートル程の大きさ。そして、ゴーレムの名前を呼び終わると、トラストの目の前に様々な幾何学模様が円を描く様に現れる。その幾何学模様の中心にゴーレムが無事に召喚される。しかし、召喚されたゴーレムはトラストがイメージしていた大きさよりも大きく3メートルも有りそうだった。

召喚されたゴーレムを見た兵士たちが、驚愕の声を上げ2・3歩後ろに下がる。しかし、兵士たちは自分たちに課せられた命令を思い出したのか直ぐに武器を構え、こちらへと突撃してくる。

兵士たちが、突撃してくるのをトラストは視界に入れながらもゴーレム以外は攻撃手段が、今は無いためゴーレムに兵士を倒せと命じ、自分はハロスの方へと向き直る。

「ハロス！ お前も手伝えよな！」

「いやあ、俺もそのつもりだったんだけどよ……。ゴーレムすげえな」

そう言うハロスは、確かに腰に差していた剣を抜いていた。ハロスの言葉が、気になりゴーレムが戦っている場所へと顔を向ける。そこには、確かにハロスの言うとおりゴーレムが頑張って戦っていた。自分に向かってくる兵士の攻撃を、岩で出来た腕で防ぐ。防ぐと、その兵士の顔を目掛けてパンチを繰り出し遠くに吹き飛ばす。

そして、ゴーレムを無視しトラストたちへと向かってくる兵士には、ゴーレムを相手している兵士を両腕で掴み、トラストたちに向かってくる兵士に投げ飛ばしている。そして、トラストたちに向かってくる兵士はゴーレムに投げ飛ばされた兵士の下敷きになり地面に這い蹲ることになった。

その様な攻防を繰り返していたが、途中から兵士たちは二手に分か

れ5人でゴーレムの相手をし、残り5人がトラストたちへと向かってきた。

その事に気づいたゴーレムが何とかこちらに戻ってこようとするが、兵士5人の攻撃によって、邪魔をされる。そして、トラストたちに向かってきた5人が漸くトラストたちを攻撃範囲に捉え、攻撃を仕掛けてくる。

トラストに2人。ハロスに3人と別れて攻撃を仕掛けてくる。トラストは、武器が無いため兵士の攻撃を避けながら、どうしようか考える。

「全く、逃げ出した者は用済みか」

そういう命令を受けているのか兵士たちの攻撃を容赦がなかった。ゴーレムとの戦闘で満身創痍のトラストには、容赦のない攻撃を避け続けるのは厳しいものだ。武器のあるハロスに期待してみるかと思ひ、チラッとハロスを見る。しかし、ハロスも兵士2人に減らしていたがまだ時間が掛かりそうだと舌打ちをしたくなる。

仕方なくトラストは兵士の持つ武器を奪う方向で動くことに決める。槍を持つ兵士と剣を持つ兵士が居て、槍の突き攻撃を避けると避けた先で剣が振り下ろされてくる。それを、更に避けて剣を奪うため懐に入り兜に手を掛け、思いつきり地面に叩きつける。

そして、地面に叩きつけられ気絶したのか動かない兵士の持つ剣を奪おうと手を伸ばす。しかし、槍が突き出されてきて剣を取ることが叶わなかった。残った兵士と1対1で対峙する。兵士が、槍を連続で突き出してくる。それを、3回連続で避けると槍を踏みつけ攻撃を防ぎ、兵士に走りよる。走りより、そして兵士の槍を押さえるためにも地面に手をつき、兵士の顔を目掛けて蹴りを放ち地面に倒す。

そして、倒れた兵士を数秒見つめる。動かないのを確認すると、ホッとため息を吐き剣を取りに行く。剣を取ると、ハロスはどうなっ

たのかと思い周りを見渡す。見渡すと、ハロスはい既に戦闘を終え兵士の腰辺りを探っていた。

ハロスの無事を確認すると、トラストはゴーレムが戦っているはずの方向を確認する。ゴーレムも戦闘を終えていて、周りを倒れた兵士で囲まれていたがそれを気にした様子もなく立っていた。

「我が命に従え！ 戻れ、ゴーレム！」

もう既に戦闘の心配も無いため、ゴーレムを戻す。そして、ハロスの居る場所へと歩き出そうと一歩踏み出す。

しかし、ゴーレムとの戦闘に続き兵士の戦闘のためか急に疲れがドツとやってきて地面に膝をついてしまう。

「はぁはぁ……ま、だ……たおれ、るわけには！」

トラストは、まだ安心できる場所に居るわけじゃない。だから、まだ倒れる訳にはいかない。そう思い、何故か意識が落ちそうになりながら立ち上がろうとする。だが、トラストの思いも虚しく地面に倒れてしまう。そして、ハロスの呼びかけが聞こえながら返事も出せずに意識が落ちる。

第4話（後書き）

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録して頂けると作者のやる気に繋がりますので、よろしくお願いします。

第5話

豪華に装飾されたテーブル。そのテーブルを囲う様に座る父ジェイ、12・13歳ぐらいのトラスト、10・11歳ぐらいの妹シオン、そして父の弟トゥレチェ。その座る姿を後ろから眺めるトラスト。眺めるトラストに気づいた様子もなく幼き日のトラストたちはテーブルに並べられた食事を食べていく。

またこの夢かと、トラストは思う。父が殺されてから一時、悪夢の様に見続けた夢。当時は、この後に起きる出来事で泣き叫び目が覚めると言う事があった。けど、何がきっかけだったかは忘れたけど突然、夢を見なくなった。

過去を思い出していると、夢の中のトラストたちが食事を終えた。すると、トゥレチェが、何かを言い手を叩く。その一連の流れが終わると、トラストの後ろにあった扉が突然開かれ、兵士たちがなだれ込んでくる。なだれ込んできた兵士たちは、幼きトラストとシオンを捕え、部屋の外へと連れて行こうとする。連れて行かれようとする幼きトラストは暴れ兵士の動きを邪魔をしようとする。そして、父へと向かっていった兵士たちは躊躇した様子もなく武器を、父の心臓へと突き刺していく。それを、見た幼きトラストは暴れることを止めてしまい扉の外へと連れて行かれる。しかし、外に出る前に幼きトラストは父が死んだことで笑い続けるトゥレチェに憎悪の視線を向け、何かを叫ぶように口を開いている。

何かを叫ぶトラストの言葉も気にした様子もなく、トゥレチェの未だに笑い続ける姿を最後に夢の世界は暗闇に包まれ終わりを告げる。

「うう……」

何だか、気分が悪くなる夢を見ていたような、心がざわつく感じを覚えてつともトラストはぼやけた視界のまま周りを見渡す。トラスト

の斜め右にハロスが大きな岩を背に、土で衣服が汚れることも気にした様子もなく座ってこちらを見ていた。

「ふう……漸く目覚めたか」

ハロスは、そう言うのと横にあった何かを手にとるとこちらに投げつけてくる。その投げつけられた物を咄嗟に受け取り、何なのかを知るために見る。

見てみると、衣服だった。所々切られていて素肌が見えるが、今着ている血まみれで布切れと化している衣服だった物よりも断然良い状態だろう。どうして、こんな物を持っているのか気になりつつも、先に此処が何処なのかをハロスに尋ねる。

「洞窟を少し南に外れた所。それより、服着替えたらどうだ？」

「そうさせてもらうよ。それにしても、この服はどうしたんだ？」

そうボロ布の様な服を脱ぎながら尋ねる。すると、どうやら先程戦った兵士たちの比較的綺麗な状態の服を頂戴したようだった。そして、戦闘を終えた後意識を失った俺を背負い此処まで運んでくれたということだった。

「見捨てずに、運んでくれてありがとうよ」

「気にするなよ」

トラストは、ハロスに感謝の言葉を言い服を着替え終わったのでハロスと向かい合うように、地面に座る。そして、何故自分が急に倒れてしまったのか考えてみる。

確かに、ゴーレムの後に兵士10人との戦闘は厳しいものだった。けど、それだけで意識を失ってしまう様な体力ではないと思っていたるし、血を流しすぎた訳ではなかったはずだ。何だが、急に体全体

の力が抜けていく様な感覚だった。まるで、何日も徹夜を続けた後の様に。何か知らないかと思い、ハロスにその事を言ってみる。すると、意外にも直ぐに答えが分かった。

「たぶん、魔力を使い過ぎたんだろ。魔力を使うと脳に負担が掛かる。そして、脳の負担が限界を超えると、体が勝手に脳を休ませるために意識を失わせるって事は比較的事だ」

その後、初めての召喚だったんだ。倒れるのはしょうがないと言われる。そして、これからどうするつもり？　とも聞かれる。

トラストは、名前は忘れたがやたらと豪華な服を纏っていた男が言っていたトゥレチェが、闘技場に来ているとの事なのでその後の動きが何か分からないかと思い、馬鹿かも知れないがスキアの街に戻り、情報を仕入れようと思う。

ハロスには、目的などは黙っておきスキアに戻ることを正直に話す。

「おいおい、捕まるつもりか？　恐らく街の中は兵士だらけだぞ？」

「それでもだよ。俺は、あの街に戻らないといけない」

「ふーん。トゥレチェ・D・フロウなら、もうスキアには居ないぜ」

そのハロスの言葉に、ビクツと肩を動かしながらも、平然と何故トゥレチェが居ないって分かるのかと聞く。どうやらトラストが、気絶している間にやたらと豪華な装飾の馬車が兵士をつけて街から西の方角に去って行くのを見たということだった。

しかし、何故トラストがトゥレチェの事を知りたがっているのかを気づけたのか疑問に思い聞いてみた。

「何故って、食堂でトゥレチェの名前が出たとき殺気を出していたし……何より、トラの名前は、トラスト・フロウ。トゥレチェ・D・フロウと同じファミリーネームだ。同じフロウ家なのに、トラは奴

隷。トゥレチェは貴族。何かあるって考えるのが普通じゃないか」

言われてみれば、ハロスの言うとおり分かりやすかったのだろうか。それなら、正直に話していればよかったなと少し思ってしまった。しかし、スキアに居ないと言うならばグラーツィアに戻ったのだろうか？ もし、そうだとするならばグラーツィアに入る前に追いつかなくてはいけない。入られてしまえば、警戒も厳しくなり護衛の数も多くなって殺す事が困難になってしまう。そう思うと、急がなければと考え立ち上がる。

「ちょっと待てよ、トラ。トゥレチェに会うつもりか？」

立ち上がり、西へと向かうとするトラストにハロスは制止の声を掛けてきた。そして、トラストはハロスの問い掛けに、そのつもりだと正直に答える。

「会って、殺すつもりか？」

「そうだとしたら……止めるのか？」

トラストとハロスは睨み合う。2人は数秒睨み合っていると、突然ハロスが笑い出しトラストの肩を叩く。その事にトラストは、訳も分からず呆然としてしまう。

「あはは！ いやいや、止めるつもりなんてないさ。それよりも、1人でやるつもりか？」

「あ、ああ。そのつもりだ」

「なあ、それ。俺にも手伝わせてくれないか？」

ハロスの急な提案に、トラストは思考を止めてしまう。今、ハロスは何て言った？ トウレチェ殺しを手伝いたいと言ったよな？ 何

故、ハロスそんな事を申し出る？ 理由が分からない。それに何より、トゥレチェ殺しはトラストの私怨だ。自らの力の為に、トラストの父ジェイを殺したトゥレチェへの復讐だ。そんな私怨に全く関係のない人間を巻き込むわけにはいかない。

「ハロス。トゥレチェを殺すのは私怨だ……！ だから、関係のないハロスを巻き込むつもりはない！」

「関係ならある！ 俺の両親は、ウムブラ王国軍によって殺された！ そして、その軍を率いていたのがトゥレチェだ！」

「もし、そうだとしても……」

トラストは、父親だけだが両親を殺される悲しみは分かるつもりだ。だから、本当ならば手伝ってくれるのを喜ぶべきなんだろう。けど、本当に巻き込んで良いのかと迷ってしまう。

ハロスの提案に迷っていると、ハロスに肩を思いっきり掴まれてしまう。

「トラスト！ 何を迷う必要がある！ 復讐を遂げたいんだろ！？ ならば、どんな手段を使ってでも復讐を成し遂げろ！！ 結果を残さない目標など目標ではないんだから！」

「……分かった。ハロス、これから宜しく頼む」

第5話（後書き）

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録などして頂けると作者の励みとなりますので、宜しくお願い致します。

第6話

ハロスが行動を共にする事になり、これからどうするかを話し合う。そして、当分の目的はトゥレチェの情報を集めながら、西を目指す。という事に決まった。話が決まると二人は、西へと歩き出す。

西へと歩き出し、1日が経った頃二人は少し疲れた顔になり自分たちの甘い考えに後悔していた。自分たちが、奴隷として居たスキアという街は闘技場という舞台もあったおかげで、それなりに人の出入りがある街であった。だから、商人たちの中にスキアに商売を遣りに遣って来る商人も居ると考えた。だから、スキアに戻っての食料購入は危険と2人は判断し、途中で商人に出会えると信じスキアに戻らず直ぐに西に発ったのだ。

しかし、未だに商人、いや人一人にさえ会う事は出来ずに2人は空腹に耐えながら西へと向かっているのだった。

それから、更に半日が経ち太陽が沈みかけていた。そろそろ、空腹の限界と野宿の準備のため、一休みを入れようかとお互いの雰囲気から、お互いに思っていると2人の視線の先に小さな影が見えた。2人は、その影に気がつくどちらも商人じゃなくても構わない。食べ物を持っている人であってくれと期待の眼差しを、その影に送る。その影が、どんどん近づいて来てその正体が2人にも漸く分かる距離となる。

それは、馬車だった。商人が乗っているかは分からないが、かなりの大きさの馬車で、馬が二頭その馬車を牽いていた。その事に、空腹で死んでいるような表情を浮かべていたトラストは、隣で笑顔でその馬車に向けて手を振りながら声を上げているハロスと同じように、両手を振り馬車が止まってくれる様に願い、声を上げた。

その後、馬車はこちらに気づいてくれてトラストたちの目の前で止まってくれた。そして、その中から出てきてくれたのは腹の肥えた

30代ぐらいの男性だった。その彼が、どうしたのかと尋ねてきたので色々あり、食料を無くしてしまったので分けてくれないかとトラストたちは頼んでみた。

すると、彼は笑顔で了承してくれて更に、丁度いい時間帯という事で一緒に晩御飯はどうかと提案してくる。それに、間を置かずに2人は了承した。

馬車に乗っていた男性は、道の横に外れ馬車を止める。そして、テントを持ってくると1人で手際良くテントの設置を終えた。

「さあさあ！ お二人、中に入って！」

トラストとハロスは、言われるままにテントの中に入っていく。

「ちょっと狭いかも知れないが、我慢してくれ」

テントに入ると、男性にそう言われる。男性に言われた通り少し3人が入るには狭かった。その原因は、元々このテント自体が3人も入るように設計されていないのと、テントの中心に干し肉などの食料が山積みとなっているのもあるだろう。

そんな事を思いつつも、2人は少し縮こまりながら三角形の形に座った。そして、2人が座るのを確認すると、男性は食事を始めた。

「さあ……もぐもぐ……2人も遠慮せずにどうぞ！」

そう言うや男性は、もうトラストたちがその場に居ないかの様に物凄いスピードで、山積みとなっていた食料を片付けていく。その光景に多少驚きながらも、約1日半も食事を取っていなかった事もあり、結局2人も男性と似たような勢いで食料を片付けていく。

食事を始めて、10分。山積みとなっていた食料の跡は、梱包して

いた袋のみとなっていた。それを、満腹となった3人は仲良く片付ける。ゴミを片付け終わると、今度はお茶を用意してくれた。男性に感謝し、お茶を受け取り飲み干した。

「ふう〜満足！ 満足！」

そう言うのと、男性は自分の腹を叩いた。叩くと、その後少し腹が波打つように揺れていたが気にしないことにした。

「この度は、夕食まで頂き助かりました。有難う御座います」

トラストは、男性に感謝して頭を下げると一緒にハロスも感謝して頭を下げた。すると、男性はそんな気にするな。困ったときはお互い様や！ と言ってくれる。

「そういや〜、一緒に飯したのに挨拶まだやったの〜」

そして、男性は自分の腹を叩きながら名乗りだした。

「わしゃ〜、ヴェンディトレ・アドモンドって名で、行商人や〜」

そして、ヴェンディトレは握手を求めてきた。トラストも握手を返しながら、名乗り返す。

「僕は、トラスト・フロ……。トラスト・フロヴァンスと申します」

トラストは、危うくフロウと名乗ってしまいそうになった。西に向かうと決めたときに、ハロスに提案された事があった。フロウという家名は、あまりに有名過ぎる。そのため、フロウと名乗るだけで注目を集めてしまう。そうになると、嫌でも噂が立ちこちらの動きが、

トゥレチェなどにばれてしまう可能性がある。それを、少しでも避けるため、偽名を使ったほうが良いと。

ハロスが、少し顔を引き攣らせながらもトラストに続いてヴェンデイトレと握手をして名乗った。

「俺は、ハロス・リーパーだ」

ハロスが、名乗り終えると元の位置に戻った。

「そういや、トラストたちは何で食料無くしたんや〜?」

「大量の魔物に襲われましてね。何とか、全滅させる事には成功したんですが戦闘の時に落としてしまったみたいなんですよ」

「そんな大変な事があったんやな〜。いや〜お二人さんが無事でよかったわ〜!」

ヴェンデイトレは、まるで自分の事の様にトラストたちに良かったな〜と言ってくる。

「そういえば、ヴェンデイトレさん」

「ヴェンでええよ〜! ヴェンで〜!」

「ええと……それじゃヴェンさん」

トラストは、ヴェンデイトレの言い様に少し困って苦笑いを浮かべつつ、ヴェンデイトレ本人の希望通りヴェンと呼ぶ事にした。

「この道を歩いているとき突然豪華な装飾の馬車が通ったんですけど……その時、見えた紋章が、フロウ家の紋章だった気がするんですけど見ましたか?」

「見たで〜。トゥレチェ・D・フロウ様やな〜。何か、急いでる感じでヴェレ峠の方向に向かったな〜」

それを聞いたトラストとハロスは、互いに顔を合わせ笑いあう。どうやら、ヴェレ峠という場所へと向かったらしい。ならば、自分たちも急ぎヴェレ峠に向かう事が決まった。

「急げば、トゥレチェ様に会えますかね？」

「うーん。流石に、厳しいかもしれない。でも、もしかしたらヴェレ峠を越えて北西にあるラプルって港町でなら会えるかもしれないな」

「ラプルって町ですか……すみません、地図とかありますか？」

「ん？ あるで。ちよつと待ちな」

そう言っってヴェンデイトレは、立ち上がり一度テントの外に出る。5分程すると、ヴェンデイトレが左手に、丸められた茶色い紙を持って戻ってきた。

そして、地面に持ってきた地図を広げてくれる。サッと、トラストは地図全体を見ると、ヴェンデイトレに話を持ち掛ける。

「すみません、ヴェンさん。それ売って貰えませんか？」

「売るのは構わないが、金はあるのかい？」

売買の話になると、ヴェンデイトレは今までのんびりとした雰囲気になくなり目が厳しいものに切り替わる。その変わりようにトラストは、本当に行商人なんだと再認識する。

「すみません、残念ながら現金はありませんが……これで売って貰いたいのですか」

トラストは、そう言っってハロスを見て頷く。それを見たハロスは、ズボンに付いているポケットから何かを取り出すとヴェンデイトレ

に見えるように手を開き、持っているものを見せる。

開かれた手の平には、ガラスの様にランプの光を反射し紫色で四角形の形をした宝石のアメジストが乗っていた。

そのアメジストをヴェンデイトレは手に取り、光を通して見たりして色々確認している。トラストには、アメジストの価値が一体どのぐらいするのかは分からないが、地図だけならばかなりの利益があるだろうと考えている。

まさか、あの時の兵士の一人が持っているとは思ひもしなかった。しかも、戦闘行為によって破損するような事もなくきれいな形を保っていたのは運が良かったとトラストは思う。それにしても、何であの兵士は宝石なんて不要な物を持っていたんだ？ いや、そんな事考えてもしょうがないか。今は、ヴェンデイトレの答えの方だ。

「分かりました。その地図をお売りしましょう」

ヴェンデイトレの答えにトラストは、笑顔を浮かべ両者とも握手をする。そして、広げられていた地図はヴェンデイトレによって綺麗に丸められトラストの手に渡される。

第6話（後書き）

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録をして頂けると作者の励みに繋がりますので、宜しくお願い致します。

第7話

「ほなゝ！　またなゝ！」

そう言い、ヴェンディトレは馬の右手で手綱を握り、こちらに体を向け笑顔で左手を振り続ける。トラストたちとヴェンディトレの距離がどんどん離れていく。そして、整備された道からも外れていく。その様子に、トラストはいつまでヴェンさんは手を振るつもりなんだろう？　と疑問に思いながらも未だに手を振り続けるヴェンディトレのため、トラストとハロス hands は手を振るのを止められずにいた。すると、ヴェンディトレの馬車のタイヤが岩か何かに乗り越えたのだろう。急に、馬車が上下に思いつき揺れる。そのおかげで、ヴェンディトレが漸く手を振るのを止め、前に向き直り両手で手綱を握り整備された道の方へ馬を誘導しようとする姿が、何とか見えた。その成り行きに、大丈夫なのかと何故か心配に思いながらも、やれやれと苦笑してハロスへと向き直る。やはり、ハロスも同じ気持ちを抱いたのか顔が笑っていた。

「商売のときと、そうじゃないとき違いすぎるだろ」

トラストは、つい昨日の事を思い出しそう言ってしまふ。昨日、トラストたちが地図を売ってほしいと言ったとき、それまでのゆったりとしたヴェンディトレの雰囲気急に、鋭く尖り相手の嘘を見分けようと気を張り詰めた雰囲気変わったときは少し驚いたものだ。地図の無事に手に入れた後、その事を本人に言ってみると恥ずかしそうに笑いながら、手で頭を叩いていた。

商人同士の交渉だと、利益を求めるため嘘を吐く商人もいる。だから、嘘を吐いているかどうか相手の目を見て逃さないようにやっていたら、自然と商売のときは反射的にあぁなってしまうとの事だっ

た。トラストは、商人も大変なんだなと思いつつもその後、少しだけ喋ると3人は眠りにつき、つい先程本来の目的であった食料を分けてもらい別れたということだ。

そして、トラストは地図を広げてハロスと当分の目的地であるラプルの場所を確認する。

その地図には、中央に岩石のような体を持ち、恐竜の様に歩く魔物が、顔を東に向け少し口を開いた様な形をした、アマルティア大陸。ウムブラ王国の首都グラーツィアが、そして口に当たる部分がルクス王国、いや違ったか今はウムブラ王国の領土だったな。そう思いながらも、トラストは視線をアマルティア大陸から右に逸らす。アマルティア大陸の北東に、今トラストたちが地を踏んでいるソマティア大陸が長方形の左上の頂点を、少し左上に向かって引っ張った様な形で乗っている。

そのソマティア大陸の南東に、トラストたちが逃げてきたスキアという街があり、スキアから北西に進むとヴェレ峠があり、ヴェレ峠から更に北西に進むと港町のラプルがある。

トラストとハロスは、ラプルの場所を確認すると地図を丸めてトラストの後ろのポケットに直した。そして、簡単に荷物の確認をする。確認といっても、ヴェンデイトレに分けてもらった食料とそれぞれの左腰に差している剣ぐらいだったが。

確認を終えると、2人は頷き中間地点のヴェレ峠を目指して道なりに歩き始めた。

歩き始めて、トラストは漸くだ漸くトゥレチェに復讐が、妹のシオンと母上を探し出す事が出来ると思った。トラストにとって、スキアの街での6年間は自分の力の無さに後悔し続けた日々だった。何度、考えた事か。あの時、自分に力があれば見す見す父上が殺される事、シオンと母上と離れ離れになる事は無かったのではないかと。だから、トラストはあの場所と同じ事を繰り返さないため力を求めるかの様に殺し、生き続けた。そして、トラストはあの場所から逃

げ、復讐と再会への道を一步踏み始めたのだ。
まずは、トゥレチェだ。トゥレチェならばシオンや母上の居場所を知っているかも知れない。

トラストは、そんな事を考えたりハロスと喋りながら歩いていると、太陽が頭上来そうな時間に、ヴェレ峠の入り口へと無事に着いた。しかし、ヴェレ峠の入り口付近には人だかりが出来てあった。トラストたちは、近くに行きその人だかりの間を一人捕まえて、何かあったのかと尋ねる。すると、尋ねられた人は、苛々を隠す様子もなく怒った表情で答えてくれた。

「峠の途中で、サイクロプスが暴れてるんだとよ！ 全く、何をやってんだよ兵士たちは！？」

トラストは、怒りながらも教えてくれた人にお礼を言って人だかりから離れる。そして、人だかりから離れた所で小さな声で面倒だなどという？ とハロスに聞いてみた。トラスト個人は、トゥレチェが何時までもラプルに居る筈がないと思うから急ぐ必要があると考えている。だから、強行突破でサイクロプスと戦う可能性を視野に入れつつ峠を越えたい考えをハロスに言う。

「ふむ。確か地図では、別にこの峠を越えなくてもラプルに向かう事は可能だったはず……だが、その場合何日掛かるかも分からない。何より、俺たちが持っている食料が長くても5日か6日。……仕方ないサイクロプスは、可能なら逃げるといふ方向で峠を越えるか」

ハロスは、何かを考えるような仕草をしつつ言葉を紡ぐ。恐らく、自分の頭の中で地図を思い描いて考えていたのだろう。トラストは、地図をポケットから取り出し確認してみた。確かに、北に進んで行けば峠を越えなくてもラプルに向かう事は出来そうだった。しかし、

その道を選んだ場合恐らくウムブラの兵士たちがサイクロプスを倒すのを待って峠を越えても早くラプルに着けそうなぐらい遠回りになりそうだった。

だから、トラストの提案通りということもありハロスに了承の旨を伝え、2人は人だかりの山を掻き分けていき、一番前へ出る。そして、ウムブラの兵士が設置したであろう木で作られた看板と、木で出来た防護柵を2人は止めようとする言葉が無視して越えていった。

峠を歩き始めて、2時間。サイクロプスが暴れているという話が本当かと疑いたくなる程に、誰に会うことも無く、何もない峠の道が続いていた。そして、折り返し地点である緩やかに登り続けた道から緩やかに降る道へと切り替わった。

「登り始めて、2時間。何も起きないな？」

「ああ。だが、何も起きない方がいい事だ。恐らくサイクロプスが出たってのは嘘だったんだろうな」

「しかし、何の為にだ？　嘘を吐いてまで封鎖なんて……」

トラストは、足止め以外ない気がするが、と続けようとしたが視線の先にまだ、小さいが緑色で、一つ目に一本角のサイクロプスが居た。どうやら、嘘ではなかったようだ。しかし、面倒な事になった。視線の先に居るサイクロプスは、所々傷ついて血を流しているみたいだがまだまだ体力が有り余っていそうだった。しかも、そのサイクロプスの周りには兵士の鎧らしき物体が何個も転がっている上に、トラストが見ている感じだとそのサイクロプスの左手には兵士が掴まれている。その兵士は、その左手から抜け出そうとジタバタと暴れているが、サイクロプスにとって意味の無い行動らしい。特に反応する事も無く、その兵士を見続けているようだった。

トラストが、その兵士を助けるべきかどうか迷っているとサイクロプスの左手から黒っぽい液体が噴き出した。そして、黒っぽい液体

が噴き出すと先程まで暴れていた兵士がぐったりとして、サイクロプスが何処かに放り投げた。

そのサイクロプスの行動を見て、トラストは理解した。先程、見た黒っぽい液体は、兵士の血。そして、兵士は左手から抜け出そうとして暴れていた訳ではなく、握り潰されそうになっている痛みで暴れていたのだと。

トラストとハロス、武器を抜く事も無くその場に立っていると突然サイクロプスがこちらを向いた。その瞬間、トラストは理解した。サイクロプスに自分たちが見つかった事を。そう理解すると、トラストは剣を抜き戦闘態勢に移る。隣では、ハロスも剣を抜きサイクロプスの動きを逃さないように睨みつつ戦闘態勢に移っていた。そして、サイクロプスがこちらに走って向かってくる。サイクロプスが、一歩一歩と近づいて来る度に、地面がドシン！　ドシン！　と大きく揺れる。

遂に、サイクロプスの持つ人の大きさの3倍は有りそうな巨大な木の棍棒の攻撃範囲に入ったのだろう。棍棒が横薙ぎにされようとしている。

トラストは、この攻撃は普通では避けれないと判断すると右手にある腕輪を意識する。

——大きさは、5メートル

「我の命に従え！　出でよ、ゴーレム！！！」

その言葉を言い終わると、トラストの前に様々な幾何学模様が円形に描かれその円の中心にトラストのイメージした通りのゴーレムが現れる。ゴーレムの召喚が無事成功すると、トラストは直ぐにゴーレムに心の中で命じる。

『ゴーレム！　攻撃を防げ！』

トラストの命じる通りゴーレムが、棍棒の軌道を塞ぐように立ち棍棒を体を使って受け止める。僅かに、後ろに下がって土煙が発生しているが問題は無いようだ。それを見ると、トラストはハロスに向かって叫ぶ。

「ハロス、今だ!!」

その声と同時に、ハロスとトラストは左右に別れつつサイクロプスに向かって走り出す。トラストは、ゴーレムの体を足場に使い、ハロスはサイクロプスの左腕を使いサイクロプスの弱点である目を目指す。

しかし、弱点の目を狙われていると気づいたのか両腕を思いっきり振り始めた。サイクロプスの左腕を駆け上がったいたハロスは弾かれて地面を転がる。そして、ゴーレムで押さえていた右腕を駆け上がったいたトラストは、左腕を使われた事によって弾き飛ばされてしまう。咄嗟にゴーレムが、トラストを助ける為に掴んでいた棍棒を離し、トラストを急ぎ両腕で抱え込むように受け止める。

『助かった、ゴーレム』

心の中で、ゴーレムにお礼を言うトラスト。そのお礼に答えるかの様に、僅かに頭を上下に揺らすゴーレムだった。そのゴーレムの動作に笑みを浮かべつつ、やはり図体のデカイ相手はやり難いなど痛感する。しかし、此处で簡単に諦めるわけにもいかない。何度でも倒すまで続けてやる! と意気込みトラストは再びゴーレムに命ずる。

『サイクロプスの動きを封じろ!』

今度は、命ずると同時にトラストもゴーレムを追い掛けるようにサ

イクロプスに向かって走り出す。トラストとゴーレムに釣られるように、ハロスもサイクロプスに走り出す。

ゴーレムがまずは、サイクロプスの腹に一発パンチを入れる。その隙に、トラストは、サイクロプスの右足の攻撃を入れていく。トラストの攻撃の痛みに、サイクロプスは痛みの原因であるトラストを踏み潰そうと足を持ち上げる。その持ち上げられた隙間にゴーレムは、自分の両腕を入れ思いっきり大きく持ち上げる。

するとサイクロプスは、右足を持ち上げられバランスを崩すとそのまま後ろに大きく地面を揺らしながら倒れた。そして、倒れたサイクロプスの体を伝いトラストとハロスは今度こそサイクロプスの目に到着する事が出来た。

そして、2人は同時にサイクロプスの目に剣を突き立てる。

「ギャアアアアア!!!!!!」

剣を突き立てた瞬間、サイクロプスから耳を塞ぎなくなる悲鳴が轟く。その悲鳴が消えると、サイクロプスも消滅する。そして、サイクロプスの目のあった辺りに、契約の腕輪が出現した。

契約の腕輪が、出現するのを見てトラストはサイクロプスも契約できるのかと思うと同時に、契約はしたくないなとも思う。何故なら、デカイと使える場所も限られそうだし、何よりあまり苦戦しなかった。つまり、弱いのでは？　と思ってしまうからだ。

『我の命に従え。　戻れ、ゴーレム』

トラストは、まずはゴーレムを戻そうと思い心の中で静かに命じつつ剣を鞘に戻した。そしてゴーレムは、以前と同じように小さな光となり腕輪に戻っていった。

「ハロス。俺はゴーレムが居るから今回は遠慮するよ」

「そうか。……折角だし契約してみるよ」

そう言うと、ハロスは左の人差し指に剣を当て傷を付ける。その痛み、少し顔を顰めているが、傷を付け終わると剣を鞘に戻し人差し指から溢れる血を出現した腕輪に垂らした。

そして、ゴーレムの時と同じように一際金色の光が強くなった後一度腕輪が消滅し、再度ハロスの左手に現れる。

それを、確認しトラストはハロスに声を掛ける。

「契約、おめでと!」

「あ、ああ。ありがとうよ。……さあ、峠を越えるぞ!」

何だか、ハロスが嬉しそうではないなと感じつつ兵士たちの死体をそのまま放置し降っていく道を歩いていく。

第7話（後書き）

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録などして頂けると作者の励みとなりますので、宜しければお願い致します。

第8話（前書き）

今回は短いです

第8話

サイクロプスを無事に倒す事が出来、峠を降り始めて1時間半程。その間は、特に何事も無く歩き続け漸く峠を越えることが出来た。そして、やはりこちら側も木で出来た看板と防護柵で足止めされている人たちが大勢居た。

足止めで何時間も、この場にいる人がいたのだろう。2人して、特に怪我らしき傷が見当たらない人が封鎖されていた道から歩いてくるのだ。しかも、サイクロプス討伐のため、向かったはずの兵士が居る様子もなく。

そんなトラストとハロスの前に、地面に転びそうになりながら男が飛び出てくる。トラストは、その男の後ろを見る。すると、そこには男の知り合いなのだろうか。前に飛び出てきた男に、口パクで何かを言っている。そして、トラストが自分たちを見ていると気づくと何が可笑しいのか頭に手をやりながら、顔に笑みを浮かべた。

その集団に、自分で行動できないのかと苛々してしまう。苛々しつつも、前に飛び出てきた男の様子を見る。見た瞬間、情けない姿にトラストは見た事を後悔してしまう。

そこには、こちらの様子をビクビクと伺い後ろの集団の様子も困った表情をしながら伺っている男が居た。そして、後ろの集団の急ぐ様な仕草と口パクを見ると、その男は意を決した様な表情をしてトラストたちを見る。

その男の、頼まれたから行動します的な動きにトラストは殺気を撒き散らす。まるで、この国の王の命令だからと実の兄を殺したトウレチェの行動を被って見えてしまったために。

だが、一般人に剣を抜く訳にはいかない。だから、トラストはなるべく暴れそうになる気持ちを抑え付け、男が喋る前に口を挟む。

「サイクロプスなら、討伐した」

トラストから出た言葉は、感情を抑えているのが分かるように震えていた。そして、男が次の行動を起こす前にトラストは歩き出した。そのトラストの様子に、ハロスはいくらか呆れながらも先を進むトラストに追いつこうとする。が、その前にハロスはトラストの行動に呆然としてしまっている男に言葉を掛ける。

「わりいな、お礼を言われるのが苦手な照れ屋な奴なんだ」

ハロスはそれだけを男に言うと、トラストに追いつくため駆け出した。

ヴェレ峠を無事に越え、整備された道を北西に道なりにトラストと追いついたハロスは横に並んで進んでいく。

「トラ、さっきはどうした？」

横に顔を向けながら、先程の急な殺気についてハロスは問い掛ける。流石に、もしあのままトラストがあの人たちに剣を抜こうとした場合は、どんな手を使っても止めなければならぬだろう。無駄に人を殺す必要なんて無いんだし。

「あの男の、頼まれたから聞きに来たという感じが、命令だから父上を殺したトゥレチュに被ったんだ。そう思うと、怒りが湧き上がって」

ハロスの問い掛けに、トラストは正直に答える。

その答えに、ハロスはなるほどなと頷き言葉を続ける。

「でも、トラ。この世の中、頼まれたから動いている奴なんて一杯

いるぞ。何かしらの見返りを求める為にな」

「そんなの分かっている！ だからこそ俺は、さっきの自分に驚いているんだ！」

トラストは、右手を大きく振りハロスへと向き直る。ハロスへ向き直った時、トラストが思っていたよりもハロスとの距離が近かったため、ハロスの右頬を手の甲で叩いてしまう。

ハロスを叩いてしまったため、トラストは昂っていた気持ちが沈み冷静になる。

「すまない、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。気にするな」

トラストは、謝ると同時に叩いてしまった右頬を見る。少し、赤くなっているが腫れている訳ではなさそうなので安心する。

しかし、本当にトラストは自分が情けなくなってくる。今、冷静になっと思うと何故あの時、あんな簡単に怒りが湧き上がってきたのか不思議に思えてくる。確かに、怒りが湧いた理由はハロスに言った通り。頼まれて動く姿が、トゥレチェと被って見えたからだ。しかし、頼まれて動く人間なんて理由は色々あるだろうが、一杯いる。そんな姿を、トゥレチェ本人ならともかく他人で、あんなった事は驚くしかないし、次は無いように心掛けるしかないと思う。

「ほら！ こんな所で止まっても仕方ないだろう？ 行こうぜ！」

ハロスが、この場の澱んだ空気を変えるためか、やたらと大きな声で笑顔で言うのと、今度はハロスが先に進んでいく。トラストは、その後姿を見ながら何だが情けない気持ちになっているのが、馬鹿らしくなり沈んでいた気持ちが少しはマシになった気がしつつハロス

を追い掛ける。

第8話（後書き）

この作品、後もうすぐで合計ユニークが200人を超えます。読んで下さっている読者の皆様、この場を借りてお礼を申し上げます。本当に有り難う御座います。

残念ながら、感想がありませんので皆様がどんな思いを抱きながら読んでいるのかは分かりませんが、楽しみにしている方がいると信じて、これからも可能な限り1日1話の更新を心掛けていきたいと思えますので、よろしく願います。

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録などして頂けると作者の励みになりますので、よろしければお願い致します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8459y/>

トラスト物語

2011年12月7日08時46分発行